

○早速ながら、去る二十二日のウェビナー講演会「宮廷文化の再発見」にご参加くださいまして、まことにありがとうございます。その際、十数名の方々からご質問メールを頂き、また松尾学長から過分な御所感を賜り、恐縮に存じております。ライブでは、和田代表幹事が限られた時間内で三問ほど採り上げていただきましたので、とりあえず不十分な応答を申し上げます。けれども、他の方々には失礼してしまい、申し訳なく思っています。

そこで、名大同窓会事務局の平子様にお願ひして、未回答の御質問（匿名者以外）をメールで送って貰い、また当日画面のQ&Aから私が急いでメモした匿名者の御質問も含めまして、お尋ねを適宜10問に纏め直し、各々に回答を略記させて頂きました。

〈令和三年（二〇二二）二月二十五日稿〉

Q1 文学部だけでなく修士（博士）課程まで進み、法学で学位を取ったのはどうしてか。

A1 母子家庭のために学卒後は岐阜県の高校教員となる内定をえていましたが、卒論提出直後に指導教官の弥永貞三先生から勧められて大学院へ進み、二年後に皇學館大学へ助手として赴任しました。それから二十年近くかけて研究論文集『平安朝儀式書成立史の研究』を出版しましたが、昭和六十年（一九八五）当時、既に名大の恩師他界により、法制史学会の縁で慶応大学の利光三津夫教授に提出して、法学博士を授与されたのです。

Q2 宮廷文化の研究をテーマに選んだのは何故か。

A2 在学中から平安時代の人物・事件や制度史に関心をもち、卒論で「三善清行とその時代」、修論で「令制国司の変質過程」をテーマとしました。その後、初任の皇学館大学で縁の深い伊勢神宮の諸祭儀に興味をもちまして、特に昭和四十八年の第六十回式年遷宮に向けた準備過程の諸行事や古来の衣食住を間近に拝見しました。それが平安貴族の儀式・行事や衣食住と類似することに気付き、広義の宮廷文化研究をライフワークとしたのです。

Q3 宮廷文化が唐風から和様へと変化した時期と両者の具体的な在り方はどうだったのか。

A3 わが国では、近代に入って洋風をモデルに変化してきたように、飛鳥時代（七世紀）から聖徳太子などが唐風を規範として導入に努めました。その傾向が平安前期（九世紀）ころ頂点を極めると共に、日本人の身丈にあつた和様も洗練され、唐風と併用して活用されました。その後も長らく、外来の漢字を「真名」と称して、主に男性が漢文・漢詩を公用する一方、国産の表音字を「仮名」と称して、主に女性が物語・和歌などに私用し、やがて男女とも多用するようになりました。これは外面（形式）よりも内面（実質）を重んずる日本人の柔軟性に富む知恵として、今なお大事にすべき特性だと思えます。

Q4 宮廷の儀式・行事には、神道以外の仏教的な要素や貴族以外の庶民的な風習もあるのか。

A4 宮中では、神事を最優先しながら、仏事も公式に採り入れています。たとえば、中世近世の即位式では新天皇が高御座で灌頂の印を結びました。年中行事をみても、正月の元日から七日まで神事、八日から十四日まで仏事（御修法）と住み分けて行われました。五節

供は中国伝統の風習ですが、七種粥や菊綿などは民間の風習を採り入れたものです。さらに、孔子と高弟十哲を祀る春秋の積奠^{せきてん}では、供物に中国で用いる獸肉を好まず、魚類と野菜に変えることとなります。それらの実情は、儀式書や日記類だけでなく、女流の『源氏物語』や『枕草子』などにもよく描かれており、リアルな絵図も少くありません。

Q 5 宮廷文化には天皇や貴族の政治（政務）も含まれるならば、どのように行われたのか。

A 5 律令制度（官制）は、唐を範として形作られました。しかし、頂点の天皇は世襲のスメラミコトとして至高の権威を保ちますが、中国皇帝のような独裁権を持たず、太政官の公卿たちが合議する手続きを重んじました。ただ、その最高ポストを早くから藤原氏が占め、娘を后妃に納れて権力を強化しましたので、政務は形式化して、装束や作法などの外見に注目する儀式の手順などを詳しく伝えるものが重んじられたのです。それは朝廷が実権を失った中世近世の武家時代にも、雅な有職故実の文化として存続しました。

Q 6 和様の衣装はいつころ成立し、その機能はどうか。

A 6 唐風の皇帝衣装は圧倒的に豪華なものが多いのに対して、和様の天皇衣装は地味で実用的なものが多いのです。平安前期（九世紀）ころから神専用の帛衣、平時用の黄櫨染の衣、略装の引直衣などが使い分けられるようになりました。しかも、各々の生地・紋様や色重ねなどには、四季の変化などを木目細かく盛り込む美的センスが優れています。

Q 7 名古屋城はいつころ皇室の離宮だったのか。

A 7 尾張徳川家の名古屋城は、明治四年（一八七二）の廃藩置県で国有となり、同二十七年に陸軍省から宮内省の所管に移され「名古屋離宮」と称されることになりました。昭和五年（一九三〇）名古屋市へ下賜されたのです。このような歩みは、京都の二条城もほぼ同様です。従って、大正四年（一九一五）と昭和四年（一九二八）の大礼には、天皇が東京と京都を往復される際、名古屋離宮に宿泊しておられます。

Q 8 京都宮廷文化研究所とはどんなところか。

A 8 これは平成二十七年（二〇一五）に「大正大礼」から百年の記念展覧会を考えついた私が、京都の井筒装束店などに協力を求め、準備を進める過程で設立した一般財団法人の小さな研究所です。同三十年に「京都の御大礼」特別展覧会完了後、私は代表を学友久禮旦雄氏（京都産業大学准教授）に譲り、顧問として少し手伝っております。ここを一拠点として宮廷文化の研究と発信に寄与できれば幸いです。

Q 9 「象徴」と定められる天皇の役割を、共和制の外国人にも理解できる説明は可能か。

A 9 日本国憲法の草案を作成させたGHQ司令長官のマッカーサーは、天皇を国家の「元首」(The Head of The State)と認めていましたが、民政局のスタッフが、旧憲法の元首と混用されないよう、国家と国民の「象徴」(The Symbol)という表記に改め、それを日本側でも受け入れたのです。従って、戦後の象徴天皇は「政治的な権能を有しない」けれども、日本国家を体現し、また日本国民の統合を表現する至高の存在として、④憲法の定める国事行為、⑤国民のためにふさわしい公的行為、⑥国家・国民のために祈る祭祀行為を「お務め」とされています。

このような象徴たる天皇の理解を日本人自身が正確に共有して、外国の人々に親切な説明

をする必要があります。幸い既に多くの国々では、日本の天皇が最も道徳的にすぐれた平和を愛好する文化人だ、と好意的に受けとめられているようです。

Q 10 アフター・コロナのライフスタイルに、宮廷文化はどのような意味をもつと考えるか。

A 10 昨年来の新型コロナ禍は、近代とりわけ戦後の日本人が追い求めてきた欧米的な価値観や生活の在り方を否応なく見直す機会となりました。しかしながら、単純に前近代へ後戻りすることも、空想の未来へ先走ることもできません。とすれば、人の命（人間の存在）は、天地自然の恵みと古今東西の人々のおかげにより生かされて在りうることを再認識して、それに感謝するような万物共生のスタイルを取り戻し活かすことに意味があると思われまふ。そのような在り方を今なお保持され、自然と祖先などに感謝する祭儀行事を粛々と励行されているのが、天皇であり皇室の方々であることに気付くならば、それを一つの手本として学ぶことができるのではないのでしょうか。もちろん、天皇も皇族も、人間として長所短所があり喜怒哀楽をもちながら、長い歴史と広い視野に立って公的な務めを誠実に果しておられるからこそ、ふだん今さえよければ自分さえよければと考えがちな我々の在り方を省みる際に、具体的なお手本ともなりうるのだと感じています。

〈追記〉

当日、採りあげられたお尋ねに対して即座にお答えした中で触れられなかったこと、また後で知らせて頂いた匿名者の追加質問も含めまして、少し補っておきます。

- (1) 皇位継承の儀式として、令和元年（二〇一九）五月一日「即位礼正殿の儀」（国事行為）が行われ、その中に「剣璽等承継の儀」がありました。この剣と璽は、『古事記』『日本書紀』の神代物語にみえる「天叢雲の剣」と「八咫瓊曲玉」に由来します。それと「八咫鏡」を併せて「三種の神器」と称します。しかも、鏡は知恵、玉は仁愛、剣は勇気を表すものと解されています。そして、これが天皇に必備のレガリアであり、君徳のシンボルとして重んじられてきました。それが戦後の憲法下では、「皇室経済法」により「皇位とともに伝わるべき由緒あるもの」と定められ、今回も承継されたのです。なお、剣璽以外の「等」は、天皇が国事行為などに用いられる公印（金印）の「天皇御璽」と「大日本国璽」から、皇居・京都御所にある超国宝級の文物まで五千件以上が含まれています。

- (2) 歴代天皇の多くは国内外の学問に精通されており、現在の第一二六代天皇も、専門の歴史学だけでなく、世界の環境問題などにも極めて造詣が深く、即位直前に和英文の講演集『水運史から世界の水へ』（NHK出版）を出されています。

また、ほとんどの天皇は真情を和歌（短歌）に詠まれ、近世には「古今伝授」にも寄与されました。とりわけ明治天皇は六十年近い生涯で十万首余の和歌を詠まれ、また昭和天皇も一万首以上詠まれたといわれています。そのうち公表されているのは、前者が四千首弱、後者は数百首にすぎませんが、昭和天皇は晩年の四年間（84歳～87歳）に二七〇余首も詠まれた直筆の草稿を遺されました。それを下賜され秘蔵していた側近の関係者から解説の協力を求められた私は、そのすべてを『昭和天皇の大御歌』（角川書店、平成三十一年四月刊）に収録させて頂きました。それを通して、晩年の「人間天皇」が何を願われ何に努めておられたかを学ぶことができました。ウタは心の中を訴える「雅の源」なのです。